

堂園晴彦医師

鹿児島市在住

医学博士。堂園メディカルハウス院長、学校法人「錦ヶ丘幼稚園」理事長、
社会福祉法人「錦ヶ丘保育園」理事長、

1952年に鹿児島市で生を受けられました。慈恵医大在学中はラグビー部で活躍されるとともに、寺山修司率いる演劇実験室「天井桟敷」に在籍されるなどマルチな才能を発揮されます。医師としてのスタートは産婦人科ですが、国立がんセンターでもオールマイティーに研鑽を詰まれ、その後、慈恵医大講師、鹿児島大学講師として勤務されます。1981年、マザー・テレサの来日に際し、天声人語にマザー・テレサのことが書かれており、その内容に感銘を受けられ、以後、マザー・テレサを人生のモデルとされます。1991年にはご実家の産婦人科医院を継がれます。まだ制度も整っていない時代から積極的に在宅ホスピス・訪問診療を行い、看取りもしてこられました。そして、1996年に日本初のホスピス機能を備えた有床診療所「堂園メディカルハウス」を開業。「北風の中、寒さにふるえながら背中を丸めて旅する旅人に、そっとフロックコートをかけてあげよう」（フロックコート・スピリット）の理念のもとに医療を展開されています。親が死にゆく子どもたちへの絵本やアニメを使ったデスエデュケーションにも取り組んでこられました。また、2001年には「病ではなく、病を持つ人を診ることができる医療人を育てる」ことを目指してNPO法人「風に立つライオン」を設立、医学生をインド・コルカタのマザー・テレサの施設「死を待つ人の家」に派遣し、最新の医療機器はないけれども寄り添う医療とはどういうものかを考える研修を行ってこられました。産科医として幼い命のサポートに力を注ぎ、1993年から特別養子縁組に取り組み、同時に、2000人の看取りをされ、現在は悩みの外来人生科を創設、2018年4月からは検死医もしていらっしゃいます。2011年に現代の長屋「ナガヤタワー」を建設し、新たらしくも懐かしい共生型ケアを創出されました。親と一緒に暮らせない子供のためのファミリーホームにも場を提供されています。つねに、「生まれる前の命とそのお母さん」から高齢や病気で死期の近い方まで、あらゆる人々を暖かな眼差しで見つめ、社会を動かし、斬新なアイデアを次々と実現していらっしゃいます。まさにマザー・テレサの愛を実践していらっしゃるのです。

著書

『水平線の向こうから』

『それぞれの風景一人は生きたように死んでゆく』

『サンピラー お母さんとの約束』